

路傍の石

山本有三

新潮

石の傍路



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草60 B



乱丁・落丁本は御面倒か小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にて取替えいたします。

振替 東京四一八〇八番
編集部 (〇三)(二六六)五四二一
業務部 (〇三)(二六六)五一
郵便番号 一六二

発行所 株式 新潮社

発行者 佐藤 亮一

著者 山本 有三

昭和二十五年十一月三十日 発行
昭和四十年十月十五日 五十四刷改版
昭和五十年九月三十日 七十刷

新潮文庫

石の傍路

山本有三著

新潮社版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

くち絵のかわりに.....	七
中学 志 望.....	一五
その夜のことは.....	二六
実 学.....	四
意 地.....	三
赤 い 糸.....	八
吾 一.....	一九
先祖と家がら.....	二七
うつりかわり.....	一四
前 か け.....	一五

やぶ入り	一八三
物価騰貴	二〇三
東京	二三三
ダルマさん、ダルマさん	二四二
かんなん、なんじを玉にす	二五九
言いわけでは、ランプはつかない	二八一
次野先生	二九八
ペンを折る	三三八
あとがき	三三三

路
傍
の
石

くち絵のかわりに

そのとき、吾一は学校から帰ったばかりだった。はかまをぬいでいるところへ、おとつあんが、ひょっこり帰ってきた。おとつあんは、彼に銅貨を一つ渡して、焼きイモを買ってこいと言った。よっぽど腹がすいているらしく、いやにせか／＼していた。

吾一は、いそいで路地を駆けだして行った。

ちようど、おやつ時刻だったので、焼きイモ屋の店さきは、ふろしきを持った小僧だの、オカモチをさげた女中だのが、黒びかりのする、大きなカマの前に、いっぱい立っていた。なかなか順がまわってこないの、吾一はいら／＼したが、やっと、彼の番になった。

「おつぎは、おいくら。」

イモ屋のおやじは長い竹のハシを動かしながら、いそがしそうに言った。

大きな店の小僧たちが、十銭も二十銭も買って行くなかで、少しばかり買うのは、吾一はなんとなく、きまりが悪かった。彼はちいさな声で、「二銭。」といった。

「おいきた。」

主人は威勢よく答えて、カマの中から、なれた手つきで、ひょい／＼とイモをはさみあげた。

きょうはバカにまけてくれるんだなあ、と吾一は思った。やがて新聞にくるんでくれた焼きイモを受け取って、厚いカマのふちの上に、一錢銅貨を置くと、

「あつ、ちよつと待った！」

と、おやじはとんきょうな声を出して、吾一から急に包みを取りもどした。そして、三つ、六つと勘じょうしながら、包みの中ものを、カマへ返しはじめた。おやじは一錢を十錢と聞きちがえたものらしい。向こうがまちがえたのではあるけれども、いったん、包んでくれたものなから、数をへらされることは、こつちが悪いことでもしているように見えて、ひどくきまりが悪かった。吾一はカマの前に立っていることが苦しくなつて、逃げだしたくなつた。

そのとき、

「はいよ。」

と言つて、おやじが、ちいさな袋を渡した。吾一はそれを持つと、どろぼうのように、こそこそと店さきから姿をけした。

うちに帰ると、どうしたのか、おとつつあんはいなかった。彼は「おとつつあーん。」と大きな声を出して呼んでみたが、返事がなかった。さっき、いやにせか／＼していたから、急に用を思い出して、また出かけて行つたのかもしれない。しかし、こんな思いをして買ってきたのにと思ふと、彼はくやしかった。

吾一はそとへ遊びに行きたかつたが、あいにく、おつかさんもいないので、買ってきたもの

を、置きっぱなしにして行くわけにはいかなかった。こんなにしてしまうと、焼きイモがつめたくなってしまう。彼はさめないようにと思って、袋のまゝふところに入れて、あつためていた。しかし、おとつあんも、おっかさんも、なか／＼帰ってこなかった。

と、えりとえりの合わせ目から、なんともいえない香ばしいにおいが、ほど合いのあつたかさを持って、ぼうっとのぼってくる。吾一は大いに誘惑を感じたが、思いきって、両方のえりをびしんとかき合わせて、顔を横のほうに向けていた。それでも、あごの下のほうから、香ばしいにおいがあがってきたが、彼は目をつぶって、がまんをしていた。すると、今度は焼きイモのぬくもりで、おなかがだん／＼あつたかくなってきた。あつたかになると、腹がとき／＼ガマのように、グーと、うなりだした。

そのころ、吾一はおやつをたべていなかったから、わけでも腹がすいていた。お小づかいをもらわないわけではないけれども、小づかいは、毎日、貯金バコにほうりこむことにしていた。買い食いをしないで、小づかいはなるたけ貯金するようにと、学校の先生から言われて以来、それを実行しているのである。しかし、三時ごろになると、毎日おなかがすいてたまらなかった。けれども、そこを我慢して、小づかいをつかわないようにしなくてはいけないのだと思って、こらえてきたが、きょうは、ふところの中にすばらしいものを持っているのである。しかも、これをたべたところで、貯金は少しもへるわけではない。あごの下からは、あい変わらず香ばしいにおいが鼻を突いてきた。焼きイモのにおいというものは、特別、鼻を刺激する。

「おだちに、一つぐらい、いゝだろう。」

とう／＼、こらえられなくなって、吾一は袋の中に手を突っこんだ。

きょうのは丸やきなので、わけてもうまかった。彼は夢中で一つたいらげてしまった。一つたべると、前よりもかえって食欲が増してくる。と、ひとりでに手がふところの中にはいつて、また一つ取り出した。さっきの焼きイモ屋での不愉快なことなんか、もうすっかり忘れてしまっていた。

そして、一つ、二つとたべているうちに、一錢ぐらいの焼きイモは、いつのまにかなくなつて、ふところの中は、新聞がみの袋だけになってしまった。

べしやんこになっている袋が、指のさきにさわった時、吾一は言いようのない寂しさにおそわれた。彼は泣きだしたいような気もちになった。そして、ふところの新聞がみの袋を引っ張り出して、はしのほうを、わけもなく、ちぎっていた。

やがて、おとつあんがどこからか、あたふたと帰ってきた。おとつあんはあがるが早い、か、焼きイモはどうした、と言った。

吾一は答えられないので、下を向いたまゝ、焼きイモの袋を、じいっと見つめていた。

「なんだ。食ってしまったのか。しょうのないやつだな。」

おとつあんはキセルで、火バチのふちを強くたゝいた。

吾一は思わず、すゝりあげた。

「バカ、泣くやつがあるか。」

おとつつあんはそう言つて、しかつたが、きつとまた、銅貨を投げるのだらうと思つた。そうしたら、さっきのような、いやなことはあつたけれど、吾一は喜んで、もう一度、イモ屋に駆け行くつもりだつた。

しかし、おとつつあんはサイフを出さなかつた。疲れたような顔をして、たゞキセルをくわえているだけだつた。

吾一にはそれがまた、たまらなく悲しかった。

ふいに、おとつつあんの声がした。

「おい、なんだつて、そんなところに焼きイモの袋なんか置いとくんた。早くかたづけちまえ。」

それから、いくんちもたたない時のことである。

おやつをたべないものだから、吾一は腹がへつてたまらなかつた。貯金なんて腹がへつてやりきれないから、やめてしまおうかと思つたが、先生に言われたことが守れないのはくやしいと思つた。ところが、ほかの友だちに聞いてみると、友だちもみんなやめてしまったという。「それじゃおれも……」と、ひょいと、よわ気になりかけたが、彼はこういうとき、かえつて、えこじになる子どもだつた。

「よし、それなら、おれがやり通してみせる。」

が、どうがんばってみても、腹のへることは同じだった。

あるとき、彼はうちの前で、ふと、コマをおとした。取ろうと思って縁の下をのぞくと、サツマイモがワラの中にころがっている。どうしてこんなところに、おサツをころがしておくんだろ、と不思議に思ったが、そんなことよりも何よりも、吾一のあたまにぴんときたことは、「しめた。」という、きらめきだった。

彼はさっそく縁の下にもぐりこんで、そいつを一つ取りあげた。なんだか普通のサツマイモにくらべると、少し皮の色がちがっているような気もしたが、たいして、気にもとめなかった。皮には、ほとんどろはついていなかったけれど、彼はつゝぽのそでのさきで、なんどもこすってから、大きくガクリとやった。

ガクリとやってから、彼は急に妙な顔をして、ほき出してしまった。あまみがなくて、へんに水けがあるくせに、かす／＼していた。きつと、できそこないのサツマイモだろうと、彼は思った。吾一はそいつをほうり出して、別のをかじってみた。それもやはりかす／＼だった。この中には一つぐらい、うまいのがあるだろう、と思って、四つ五つ、食いかいてみたが、どれもうまいのに当たらなかった。

「まあ、そんなところで何をしているの。」

急におっかさんの声が、上から響いてきた。

「あら、吾一ちゃん。まあ、ダリヤをみんな台なしにしてしまつて……」

ダリヤという声を聞くと、おとつあんも縁がわへ飛んできた。

その時分は、ダリヤが非常に珍しいところで、ダリヤという名まえさえ、吾一はまだ知らなかった。その球根は父おやが東京からもらってきたもので、とりわけ大事にしていたのである。

おとつあんは、はだしで飛びおりて、いきなり吾一をなぐりつけた。

「きさまは、どうして、こう食いしんぼうなんだ。ネズミのように、なんでも、かじってしまやあがる。」

その場は、おっかさんの取りなしで、やつとおさまったが、おとつあんは、なおぶり／＼していた。吾一がこんなことをするのは、つまりは、おやつをたべないからである。おやつをたべないで貯金をする、などということは、子どもには無理な注文である。そんなことは、やめさせてしまえ、と言った。

しかし、吾一はやはり貯金をやめなかった。食いしんぼうと言われたことが、ひどくこたえたのである。食いしんぼうにはちがいないのだが、そうあからさまに言われると、「食いしんぼうなもんかい。」と、はね返さずにはいられなかった。それに、彼は学校で級長をしていた。おれは級長なんだから、先生の言ったことは、どんなことをしても守らなくっちゃいけないんだという考えも、かなり彼を支配していた。

彼は、毎日、歯をくいしばって、おやつの時間を辛抱した。友だちと夢中になって遊んでいる

ようなときには、忘れてしまうこともあるが、雨がふって、うちにいるようなおりに、かなり、つらかった。そんな場あいには、彼は本を読んだり、体操をしたりしてまぎらした。ある時なんか、たまらなくなつて、貯金バコに手をかけたこともあったが、おっかさんからあけ方をおそわっていないものだから、どうしても、あかなかつた。あけられないのは、くやしかったが、あとでは、それをしあわせだと思つた。

そのうちに、彼はいなば屋の店さきで本を読むことを覚えた。いなば屋は路地の出ぐちの大きな本やで、吾一のうちのおゝやさんだつた。はじめは本をたゞ読みすることは、悪いような気がして、はしのほうで、こっそり立ち読みをしていたが、いなば屋のおじさんは、たいへんいいおじさんで、「君にはこれがいいだろう。」とか、「こんど、こういうのがきたよ。」なんて言つて、「世界おとぎばなし」や「少年世界」なんかを、どん／＼貸してくれた。

吾一は前から本がすきだつたが、こういういい図書館ができたので、彼はますます／＼本がすきになつた。彼はどんな日でも、いなば屋の店さきに姿を見せないことはなかつた。ダリヤをかじつた少年は、こんどは毎日、本をかじっていた。

それから、いなば屋へ行くと、とき／＼塩せんべいや、おいしいお菓子をもらった。もちろん、それが目あてではないけれども、吾一にとっては、それも、いなば屋へ行く一つの楽しみだつた。一方、貯金はだん／＼ふえて行つた。一日一銭か二銭の貯金だから、たいした額にはならないが、お正月とか、お祭りの時のお小づかいや、あるいは、人からもらったおひねりなぞを、吾一

はみんな貯金バコに入れてしまったから、思いのほかのものになった。貯金バコがいっぱいになると、おっかさんはそれを郵便貯金にかけてくれた。吾一はもう三円になったとか、五円になったとか言って喜んでいたが、この貯金が十円ほどになった時に、父おやはそれを引き出して、自分の訴訟事件のほうにつきこんでしまった。子どもなんか貯金をしなくてもいい、と言っていた父おやだが、事件が切迫してくると、うちにある金は、だれのものでも見さかいなく、持ち出してしまった。が、吾一は貯金帳がからになっていることは、夢にも知らなかった。

中学志望

「おっかさん、行ってまいります。」

自分のいきがまっ白く、かたまつて流れた。吾一は思わず肩をすぼめた。

でも、松を抜いたあとにさしこんである、かど松のしんが目にはいると、やっぱり、春らしい気がしないでもなかった。が、その青いものも、あたまをちぎこめて、さむそうに土のなかにかがんでいた。

吾一はかど口で二、三べん、両手をこすり合わせると、いそいでいなば屋の路地を駆けだした。カバンのあいだにはさんであるソロバンが、腰のところまで、カチャ／＼鳴っていた。吾一はカバンをおさえた。でも、ソロバンの玉はおどるのをやめなかった。